

六 花

り
つ
か

月刊俳句雑誌

2007 15th anniversary

Rikka haikukai rockoh yamada

cover designed by masami

2月号

貫



山田六甲

寒の水潜らせにけりゆで卵

寒鯛の鱗とばせてゐる厨

左義長の脇に薪積む日暮かな

大とんど青竹で四方支へをり

混ぢり込む笹や松葉や雪だるま

山頂は霧氷むひょうできつつありにけり

細雪はるか下方に港の灯

注連焼しめやきの焦げしみかんをお福分ふくわけ

どんど組むにはか作りの竹梯子はしご

白取りうすどのいくども寒の水叩く

寒

皿蕎麦さらそにからみつき来る寒卵
百ひやくたび度の寒を耐へゐる柱かな
百年の柱を磨みがく寒の水
寒の水くぐりし蕎麦そばをすすりけり
如月きさらぎの日差しの中の白磁はくじかな
手袋を脱ぎて触れたる太柱ふとばしら
雪踏せうみしブーツ揃そろふる三和土たたくきかな
天井へ向かふ階段底冷えす
泉源せんげんの湯を飲む息のなほ白し
如月きさらぎの最後の一日寝て過ごす

畳み癖探して畳む春着かなはるぎ

水谷ひで江

退院のできぬ枕へ晦日そば

二の重の目をむいてゐるごまめかな

柏手のこだましてをり初詣

初売や棚のお多福片ゑくぼ

春着（はるぎ）は年始に着る衣服、とくに和服を言う。掲句は松が明け、和服を仕舞うときの仕草がよく表現されている。

和服を着るときには、畳みじわを熨（の）してから着用するが、わずかに残ってもしいる。仕舞うときは、折り癖を探しながら、畳むが、ところどころ伸びてしまつて、分かりにくいところがある。それをいかげんに畳むと、変な筋が入つて、次着用するときに困るからだ。女性の生活のひとつまを、さりげなく詠んでいて見事。

穴あな惑まどい

貝森 光洋

穴あな惑まどい蛇だ行こうの語源にあらざれど
蛇へび穴あなに曲線が直線となり
蛇穴に入る時かすかに匂いけり
唐辛子血圧計の跳ね上がる
日中は普通の茸きのこ月つき夜よだけ

丸木橋

梶浦玲良子

石たたき傘を小脇に走りけり
間引菜が隊たい伍いごを組んで丸木橋
綿わた摘つむや鐘ひと回りして還る
秋つばめ奥歯いよいよ無言なる
蛇穴に入るくれなゐの二枚舌

吊つるし柿がき

木内美保子

遠き日を恋しがらせて吊し柿
 いつまでもぶら下がりにる烏瓜
 命めいじゆう終ゆうの折おりも蝻かまきり螂り鎌上ぐる
 遠く来し鴨に光の山河あり
 峡かい晴れて木の実しぐれが肩叩く

菊き花か展てん

笹村 政子

咲き揃ふ懸けん崖がい菊きくに葉が見えし
 白菊の縋すがりし崖の濡れてをり
 菊花展黒一色の審査員
 公園の廁かわやに飾る菊一輪
 菊花展見てゐるうちに飽きにけり

春
着

水谷ひさ江

退院のできぬ枕へ晦^み日^そそば
 二の重の目をむいてゐるごまめかな
 柏手のこだましてをり初詣
 畳み癖探して畳む春着かな
 初売や棚のお多福片糸くぼ



雪樹集

くじら雲

松本文一郎

台風を飲み込み込み太るくじら雲
秋風や干網ほしあみ 高き網あじろ 代浜はま
十六夜いざよひの点でて貰ひし薄茶かな
秋の暮行けど行けども灯ひは遠し
秋灯しゅうとう 下遠目細目に針の糸

晩秋

佐原正子

紅葉もみぢ 狩がり 温泉 卵たまご 笊ざる の中
秋蝶の吸ひ込まれゆく垣根かな
紅葉寺猫すり寄りて来たりけり
晩秋の休やすみ 田だに子等遊びをり
身に入いむや初冠雪の磐ばん 梯だい 山さん

紫式部

岩松 八重

くぐり戸の紫式部にさへぎらる
霧きりの街時計廻りにピラ配る
紅葉こうようの迫りくる中車か 駆かる
暫しばらくを母と湖こ 畔はんに秋惜しむ
飛石とびいしのごとく鴨かも 浮うく御濠おぼり かな

鈍色の空に残れる柿紅葉

延川 笙子

色を効果的に詠んだ。紅葉は青空よりも、どんよりとした曇り空の方が美しさをより味わえる。この句も余計なことを言わなかったのが良い。

どんぐりの不揃ひに秋深まりぬ

筒井八重子

「柿紅葉虫の穴より見える空」も、面白い視点。

診察を目を閉ちて待つ秋の暮

永田 勇

団栗が不揃いだっただから秋が深まったのではなく、「秋が深まった。そういえば団栗の不揃いのように私の心の中も」と感じているのだ。「不揃ひ」という言葉がそれを効果的に表現している。

団栗の独楽を回してゐたる夜

わかやぎすずめ

診察を待つ間の気持ちや病名を言わず、目を閉じて診察を待っている秋の夕方、とだけ言った。読者は、一句に示された場面と季語の持つイメージによって、主人公の置かれた状況や心理などへと想像を広げるのである。

山里の静寂を破る木の実鳥

山本ミツ子

木の実鳥とは、木の实によりつく鳥のことであるが、猿の異称でもある。静かな山里を揺るがすような群猿のけたたましい鳴き声が住民を驚かした、と解釈したほうが、この句にはふさわしい。

「夜に木の実こまを回している」とだけ、読者に提示した。あとは、読者がその場面や、心理を読み取ればよい。誰とどのようにして、何処で団栗を拾ったか。誰とどのようにして、何処で、どのような状況下で、回しているのか。それとも全て一人での行為なのか。それを想像させれば、この句は俳句の役割を果たしたことになる。言い尽くさないこと、それが俳句の大基本。

「拭き揃ふ時雨に濡れし僧の下駄」も、時雨に濡れた僧侶の下駄を拭いて揃えておく様子を素直に詠みこなしている。

六花集

山田六甲選

筒井八重子

延川 笙子

どんぐりの不揃ひに秋深まりぬ

鈍色にびいろの空に残れる柿紅葉

どんぐりを落葉の中に探りをり

柿紅葉虫の穴より見える空

卓上に団栗並べぬたる日よ

高枝に残りし柿の赤さかな

石路つわあか明り頼りにゆける日暮かな

名所より一つはづして照紅葉てりもみじ

晴天を木の葉の舞うてをりにけり

窓ごとに蒲団ふとん干しあり秋日和

わかやぎすずめ

永田 勇

へひり虫みんな揃つて日を仰ぐ

柿の種まど的はずを外れて飛びにけり

団栗こまの独楽を回してゐたる夜

診察を目を閉ぢて待つ秋の暮

黙々と歩いてをりぬ星月夜ほしづくよ

サイレンの眠りを裂けり神無月

四方よもの山粧よそおふ気付かざるうちに

小春日や母に抱きつきむづかる子

立派なる大根と腕比べ見る

配達配達の足音止まる冬の朝